

# 天徳四年・内裏炎上

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

夜半、寝についてまもなく、天皇は侍臣たちの走り叫ぶ声に驚き目が覚めた。少納言藤原兼家にその理由を聞いたところ、左兵衛陣門が燃えており、もうすでに手が付けられない状態だという。外に出てみると、火焔は天を染め盛んに燃え上がっている。天皇は急いで衣冠を着け、御剣璽篋（神器）を左近中将源重光に持たせて南殿の庭に出た。内侍所に納めてある太刀や契印などを侍臣に取りに行かせたが、火はすでに温明殿に達しており、それもできない。読経僧たちに鎮火の修法を行なわせたが、猛火は衰えず、延政門の南の廊を焼いて承明門の東辺にまでおよんでいる。天皇はいよいよ諦めて清涼殿へ移り、後涼殿から陰明門を経て西隣にあった中和院の神嘉殿へ避難した。まもなく参入してきた左衛門督藤原師氏は消火の指揮にあたらせるが、猛火は近辺にも迫り、天皇は腰輿こしぐるまによって中和院から逃れていった…。

これは、平安時代末の史書『扶桑略記』に見える内裏火災の様子である。天徳四年(960)九月二十三日、平安宮の内裏は、大規模な火災にみまわれた。火は午後10時頃から4時間程燃え続けたらしく、八省院への延焼は逸れたが内裏の建物は全焼し、宣陽殿の累代の宝物や温明殿の神霊鏡・太刀・



内裏建物の配置 『京都の歴史』第1巻より一部改変

朱色の部分が火元付近と考えられ、火は東から西へ燃え広がったようである。

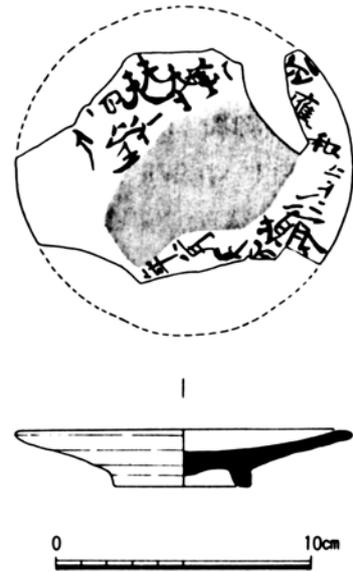
節刀・契印、春興・安福両殿の戎具（武器類）、内記所の文書、仁寿殿の器物などが灰燼に帰してしまっただけである。時に「天曆てんりやくの治」と称された村上天皇の御世である。

村上天皇は、醍醐天皇の第十四皇子で、天慶九年(946)に同腹兄の朱雀天皇から皇位を継承した。律令制度の破綻により地方行政が崩壊し、平将門・藤原純友の内乱

まで勃発したこの時代に、村上天皇は父である醍醐天皇の「延喜えんぎの治」を理想として親政政治を行なった。しかし、この復古的な親政では政策面よりもむしろ文事面に力か注がれており、その頂点が天徳四年三月に内裏清涼殿で行なわれた女房和歌合である。内裏は天皇の居住空間であり、親政政治の中心舞台であった。和歌合の半年後、



火災にあった壁土



内裏出土の墨書土器

「天・イ・應和年三月」の墨書がみえる。

内裏は平安遷都以来はじめて焼け落ちる。過去にボヤ程度の騒ぎはあったが、内裏は170年近く火難をのがれてきた。内裏の焼亡は、まさに律令時代の崩壊のきざしであった。

平安宮内裏は、現在の干本丸太町の交差点の北東に位置していた。発掘調査は、民家の新築やマンション建設ともなっていない、狭い調査面積ながらも、内郭回廊や承明門の発見など内裏の具体的な復元を行なううえでの重要な成果を挙げている。

1987年、内裏内郭の中央北西寄りの部分で小規模な発掘調査を行った。その結果、登華殿の東雨落ち溝と、その東側に掘られた大きな土壇を検出した。この土壇からは、火災にあったことを示す10世紀後半の土器・瓦・基壇の石・壁土などが多量に出土したのである。この遺物群には「天・イ・應

和年三月」と書かれた墨書土器が混じっており、火災の年代を具体的に知ることができた。應和とは天徳五年（961）二月に改元された年号で、3年間使用された。天徳四年の内裏火災の5日後、はやくも修理職・木工寮および諸国に内裏殿舎や門廊の造営が割り当てられ、翌年の應和改元の同日には、棟上げが成されている。墨書土器の「天・イ」が天徳の年号を示すものならば、この土壇は、天徳四年から應和元年にかけての内裏新造営に際して、火災による瓦礫を片付けるために掘られたものと考えられるのである。

さらに、1988年には内裏の内郭回廊の西側の発掘調査を行ない、同時期の土壇からやはり多量の焼けた土器片や壁土を検出している。これらの発掘調査結果から、天徳四年時の火災が、内裏全体に及んでいたことが考古学的に

明らかになったのである。

村上天皇は、内裏焼失の翌年、應和元年（961）十一月二十二日に冷泉院から新造内裏に移った。しかし、内裏焼失の痛手は深く、さらに皇后安子が康保元年（964）に亡くなり、天皇は精神的に衰弱されたようである。そして、康保四年（967）村上天皇は42才の若さで崩御した。内裏は、その後安貞元年（1227）四月二十二日の最後の焼失までに16回もの火災にあっており、天皇はそのたびに皇居を遷した。とくに一条天皇は、長保元年（999）から寛弘二年（1005）の6年間に3回も内裏の火災にあい、里内裏である一条院・東三条殿・枇杷殿を転々とし、最後は一条院で崩御している。村上天皇の親政を最後に、流浪する天皇の権威はしだいに形骸化し、新しい時代の流れの中で、中世への胎動が始まるのである。